

6. 好きな言葉

感謝の気持ちを込めて、「ありがとう」

「いまこうしていただけるのは、みなさんのおかげ。こうして長い間、タオルのヘム縫いができるのも、みなさんに大事にしてもらってるから。」感謝の気持ちを込めて川原氏は言う。「みなさんに助けてもらってるからこの仕事もできるんです。」



作業場で微笑む川原氏

縫製の仕事に関しては、川原氏と木下氏の関係を見無視しては語れない。縫製の仕事を始めたときも、病気から復帰したときも、その節々に木下氏と縁があった。そして、いまでも現役で縫製をつづけていただけるのは、木下ソーイングから引っ切りなしに仕事の依頼がくるからである。「木下さんと木下さんの奥さんのおかげで長いことつづけてこれたんよね。いまでは息子の誠くんがお父さんに代わって、お父さんとおなじように来てくれるしね。家族みたいなもんよね。」

川原氏は、縫製の仕事に限らず、日常生活においても「ありがとう」の言葉を口にするように心掛けています。夫の慧氏や子どもたちでも、「やってもらって当たり前」とはおもわない。「食事中に、主人にテーブルのお醤油をとってもらうにしても、当たり前じゃとおもったことはない。娘や息子が何かちょっとしてくれても、『ありがとう』という言葉だけは言いよるし、自分が元気なうちは言いつづけたい。」

長女の直美氏が、時間のあるときに川原氏の様子を見に来てくれるが、最近ではそれがとても嬉しい。娘が「母ちゃん、はい」と言

って何か買ってきてくれたりすると、「オーバーな言い方じゃけど手を合わせて、『ありがとう』とおもうんですよ」と川原氏。80歳を過ぎても家事と農業と縫製の仕事を掛け持ちする川原氏をそばで見守り、何かと気にかけて世話をやいてくれる直美氏の存在は、川原氏にとって大きい。そして、有り難い。

直美氏に関するこんなエピソードも付言しておこう。直美氏がまだ学校に通っていた頃の話である。川原氏が義父から冷たく対応されたときに、直美氏が「母ちゃんは、朝早うから晩遅くまで、一生懸命に家族みんなのご飯を用意して掃除もして仕事もしよるのに、母ちゃんだけいじめる」と義父に反論したのだ。川原氏は、「このとき娘が言うてくれたことで日頃の疲れがふうっと消えていき、子どもがおって良かったなあ」とつくづくおもった。

半世紀ほど前まで、結婚すれば多くの女性たちは男性の家に嫁ぐのは当たり前の時代であり、そこで身を尽くすのは当たり前の時代だった。いまでこそ、そうした習慣は時代錯誤的なものになりつつあるが、多くの女性たちの苦しみや辛さは想像以上だったであろう。川原氏の笑顔からは、そんな苦労は微塵も感じさせないが、「好きな本があれば教えてください」という質問への回答として、さきほどの直美氏のエピソードが話に出てきた。

本さえ読む暇などないし、本なんか読んでいたら咎められる、そんな時代を逞しく生きた川原氏。こうした女性が今治タオルの繁栄を陰ながら支えてきたのである。

最後に、川原氏には伝えたいメッセージがある。

戦争は絶対にあってはならない

戦争で父親を亡くし、幼かったため父親との思い出はなく、父親がいないことでとても辛く悲しい経験をした。そんな川原氏が伝えたいメッセージが、「戦争は絶対にあってはならない。全国民の生き地獄、殺し合い、虐殺である。」

川原氏は、どんな辛い状況に直面しても、たった一枚の家族写真と父親の遺した手紙と「朝のゆらくら、晩のしらくら」の言葉を大切にしながら、戦中と戦後を気丈夫に生き抜いた。そして、いまがある。喜代一氏の遺伝子は、立派に敏子によって受け継がれている。

（完）

編集後記

川原さんのお財布のなかに一枚の写真が入っています。川原さんの人生に寄り添ってきた写真です。川原さんの昔の写真でたった一枚、今回の記事に掲載させていただいた写真でもあります。そこに写っているのは、父親の喜代一さん、母親の花子さん、姉の智恵美さん、そして川原さん。弟の茂樹さんは花子さんのお腹のなかです。喜代一さんが戦地に派遣される前に家族みんなまで撮った写真です。

インタビュー時に「昔の写真を見せてください」とお願いしたときに、家の奥から写真を持って戻ってきた川原さん。「この写真一枚がわたしのすべてです」と言わんばかりに、ある意味他人が踏み込むにはあまりにもおこがましい特別な思いやオーラを感じ、それ以上の写真を拝見したいなどともない、何もお願いできなくなりました。自分を産んでくれた親のことを知らない悲しみ、大切な人との思い出をつくる前にその人を亡くしてしまった悲しみ、これを伝えるには言葉では薄っぺら過ぎます。

星の数ほどタオルを仕上げてきた川原さんは、理不尽な運命に翻弄され、そして女性ゆえに星の数ほどの悲しみや苦しみに絶えてきました。それでも感謝の気持ちを忘れず、「ありがとう」という言葉を大切にしている川原さん。戦後の日本を支えてきたのはこういう女性なんだろうな、とおもいます。

最後に、山盛りになったシャインマスカットと冷えた煎茶の写真は川原さんの長女・直美さんがインタビュー前日にわれわれ（辻・野口）のために準備してくれた「おもてなし」です。2018年の夏は日本全国異常な暑さに見舞われ、



各地で40℃を超える史上最高気温を記録しました。ここ今治もそうでした。8月3日のインタビュー当日の午後2時も36℃くらいはあったかと思いません。川原さんの作業場で2時間ほどお話をうかがいましたが、話の合間にいただく若苗色のブドウと煎茶に癒されました。

濃き袷に、撫子と思しき細長、若苗色の小袷着たり（「源氏物語」より）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の23人目は、(株)工房織座代表の武田正利氏である。昔の力織機を組み立てたり改造したり、自由自在に操って無類のタオルマフラーをつくる技術者兼経営者である。今治では、業界人であろうとなかろうと「工房織座」の名前を知らない人はいない。いまや武田氏のつくるタオルマフラーのファンは全国におり注文が絶えないが、どのようにして現在に至ったのかについて武田氏の歩んできた道とともに振り返る。

